J. Steinbeck "The Snake" 試論

加 藤 光 男

序

John Steinbeck の短編小説集 *The Long Valley* は1938年に出版されたが，収められている15篇の作品は "Flight" と "The Leader of the People" を除いて1933年以来既に各種の雑誌に発表されていた。"The Snake" は "The White Quail" と同じく1935年に書かれている。前年の1934年には "The Murder" が O. Henry 賞を受けていることからもわかるように，これらの短編小説群は Steinbeck が才能を磨き，将来に向って力を貯えていた比較的早い時期に書かれたものでありながら，彼の傑作と言われている作品が多い。例えば "Johnny Bear" と共に1937年に書かれた "The Chrysanthemums" をアンドレ・ジードが1941年の日記の中でチェーホフの作品にも匹敵すると絶賛したことはその例証となるであろう。さらに各作品が後の長編小説の中にさまざまな形で生かされていることも考え合わせると，彼の思想や文学的主張の基盤となっているものが，凝縮されてこれらの短編の中に入っていると言えるのである。

本論で取上げる "The Snake" には次のような Steinbeck のコメントがある。それは彼の親友であり，生物学の師でもある Edward Ricketts の死を悼み再出版した *The Log from the Sea of Cortez* の序—About Ed Ricketts の中で言及したものである。

> Mysteries were constant at the laboratory. A thing happened one night which I later used as a short story. I wrote it just as it happened. I don't know what it means and do not even answer the letters asking what its philosophic intent is. It just happened. Very briefly, this is the incident. A woman came in one night wanting to buy a male rattlesnake. It happened that we had one and knew it was a male because it had recently copulated with another snake in the cage. The woman paid for the snake and then insisted that it be fed. She paid for a white rat to be given it. Ed put the rat in the cage. The snake struck and killed it and then unhinged its jaws preparatory to swallowing it. The frightening thing was that the woman, who had watched the process closely, moved her jaws and stretched her mouth just as the snake was doing. After the rat was swallowed, she paid for a year's supply of rats and said she would come back. But she never did come back. What happened or why I have no idea. Whether the woman was driven by a sexual, a religious, a zoophilic, or a gustatory impulse we never could figure.(1)

この引用でわかるように "The Snake" は Ed. Ricketts の研究所で実際にあった事件をもとに構成されたものであり，単なるミステリー仕立ての短編小説であると彼は言っているが，しかし作家が事件を作品化する場合に，自分の意図なり思想なりをその中に塗り込もうとしないなどとはとうてい考えられず，彼の解説を文字通り受けとることはできない。

また Peter Lisca が *Wide World of John Steinbeck* の中で Elisa Allen in "The Chrysanthemums", Mary Teller in "The White Quail", Amy Hawkins in "Johnny Bear",

and the anonymous woman in "The Snake" are psychological portraits of flustrated females.[2] と書いているように "The Snake" はテーマの上からも他の優れた作品と同次元の作品であり，単なる事実に基づく物語ではなく，ficticious な要素を含んだ心理主義小説として充分批評に耐えうる作品でもある。さらに *The Long Valley* の他の作品傾向と比較する時 "St. Katy the Vergin" と並んで，この "The Snake" は極めて特異な題材を扱っていることも本論に取り上げた理由のひとつである。

とは言えこの作品に於ける作家の意図は必らずしも明確であるとは思えないが，本論では非常に独自性の強いこの作品を *The Long Valley* の他の作品と比較検討し，Steinbeck の意図に光を当てながら，この作品の文学性を探ってみたい。

1

先に引用した *The Log from the Sea of Cortez* の序で Steinbeck が書いているように，この作品は全くミステリーめいている。暗くなった研究室で Dr. Phillips がひとりで実験に取りかかったところに，背が高くやせ形の女性がやってくる。

> She was dressed in a severe dark suit—her straight black hair, growing low on a flat forehead, was mussed as though the wind had been blowing it. Her black eyes glittered in the strong light.[3]

黒いスーツを着，乱れた黒い髪は額にかかり，黒い眼は電燈にキラキラ輝いている。低いかすれ声で入っていいかと問い，するりと中に入る (slipped in)。そして Phillips が手すきになるまで待つ間の彼女は次のように描写されている。

> Her hands rested side by side on her lap. She was completely at rest. Her eyes were bright but the rest of her was almost in a state of suspended animation. (p. 77)
>
> . . .
>
> Her dark eyes seemed veiled with dust. She looked without expression at the cat's open throat. (p. 78)

冬眠中の動物を思わせる描写であるが，この作品の冒頭の部分には次のような極めて類似した蛇の描写がある。

> The snakes were bunched and resting in the corners of the cage, but every head was clear; the dusty eyes seemed to look at nothing, ... (p. 73)

頭をもたげ，黒いにごった眼 (dusty eyes) を輝やかせて休息している蛇。彼女も全く同じように rest の状態にあり，眼は電燈に反射して光ってはいるが，やはり濁っている (vailed with dust) のである。

さらに，よく見ると額が蛇と同じく flat であるばかりでなく，顎が非常に短かいことにも気付く。そして先に見たように彼女は研究所に入る時 slipped in したり，又実際に蛇を見ることになった時，Phillips が全く気がつかないうちに彼女がそばに立っていたりする。(Dr. Phillips nervously turned his head. The woman was standing beside him. He had not heard her get up from the chair.) (p. 79) 又先に引用した膝の上にきちんと置いた手であるが，彼女は体を動かしてふり向く時も手はそのままであり，意識の中では蛇のように手はすっかり退化していることを思わせるのである。

このようにこの女性には蛇を思わせる描写が多いが，この点について技巧的観点から見ると，蛇のイメージをさらに強化しているのが先の引用にある黒という色彩である。「蛇」という言葉には，創世記にあるように，Eve をそそのかし，Adam を誘惑させたことから，邪悪，狡猾などのイメージがあるが，「黒」の持つイメージもそれらと重なる。黒髪，黒い眼，黒衣は，この登場人物に附随している心理的特性を具象化し，この女性に「よこしまな」イメージを与え，精神的に陰うつな状態にあることを示唆している。それが蛇の持つイメージと完全に一体化してその邪悪性をさらに強烈なものにしていると同時に今後のストーリーの展開に不吉な余韻を響かせている。Steinbeck はこのような効果も計算に入れてこの女性を黒髪，黒い眼にし，黒衣を着せて登場させたのであり，このような所にも Steinbeck の技巧の確かさを読みとることができる。

さらに Steinbeck はこの女性に黒衣を着せて喪服の女性を連想させている。喪服を着たこの女性は何に訣別するのであろうか。作品の後半で，今までの自分自身に別れを告げているらしい，という推定が生れてくるのだが，この描写からこの女性にもうひとつの心理的状況，metamorphosis への願望を附与していることが読みとれる。これは当然蛇への変身ということになるのだが，あくまでも心理的変身と言うべきであろう。これについては手がかりの叙述をみつけ，その都度，その概念を強化し，その心理状況を分析することにする。

やがて Phillips が手すきになった時，その女性は唐突に "You have snakes?" ... "Have you a male snake, a male rattlesnake?" (p. 78) と聞き，いると判ると，"—I want him to be mine. I want to come here and look at him and feed him and to know he's mine." (p. 80) と言い金を払ってその蛇を買う。続いて蛇の餌が白鼠であることを聞いてから，"... I want to feed him." (p. 80) "I want to feed my snake." (p. 81) "I want him to eat" (p. 82) と Phillips に迫り蛇に鼠を与えることになるのである。

これらの引用からはっきりわかることは，この女性には蛇を，しかも雄のガラガラ蛇を自分のものにしたい，そしてそれに餌を与えたいという，所有願望とさらに飼育願望も抱いているということである。しかもこの場合雄蛇に対する願望である点を捨象することはできない。

雄蛇の飼育について考えを進めると，ここには間違いなく雄＝男性という置換がある。さらにこの女性には男性優位の社会に於てそれに関わる何らかのフラストレーションがあると考えられる。そこで男性をあたかも動物を飼育するように自由に扱えたらどんなにいいだろうかという願望へと変化するのであり，これは "The White Quail" の Mary Teller, あるいは "The Harness" の Emma Randall に見られることである。現実的には男への変身が不可能である以上，Mary や Emma のように男性を飼育し支配することしか，そのフラストレーション解決の道はないのである。

しかしこの飼育ということは，"The Snake" の女の言葉を借りると I want to feed him. 又 I want to feed my snake. そして I want him to eat. ということであるが，これらの表現は単に絶対権者として君臨するということだけでなく，もうひとつ別の層である，授乳，そして育児とつながる「食べさせる」という母性個有の特性と大きく関わってくるのである。彼女が "... I want him to have plenty...." (p. 85) と言う時，その点を特に強く感じないわけにはいかない。

この母性という点からさらに分析を進めてみたい。この女性が5ドルを出して雄の蛇を自分のものにしたあとの所に次のような描写がある。

She turned her head slowly toward him and the beginning of a smile

formed on her thin lips. "I want to feed my snake," she said. (p. 81)

薄い唇に微笑ともつかない微笑を浮かべて，私の蛇に餌を食べさせてやりたいというのであるが，Steinbeck はこれに似た微笑を何回か他の作品でも書いている。

例えば *The Grapes of Wrath* では Rose of Sharon が死にかかっている老人に自分の乳房を含ませたあと ... and her lips come together and smiled mysteriously.(4) と描写し，これでこの作品を結ばせている。この微笑は女性が女性としての機能を全うした時の満足感であり，女性としての使命を全うした時の安堵感ではなかろうか。男性とは違って種の維持，生命の継続に直接関係する女性特有の神秘な情感である。

さらに *The Red Pony* の第3話 "The Promise" から引用したい。

> The bay mare Nellie quickly grew complacent. As she walked about the yellowing hillsides or worked at easy tasks, her lips were curled in a perpetual fatuous smile. She moved slowly, with the calm importance of an empress.(5)

これは妊娠した雌馬の笑みであり，やはり女性の使命を果たした満足感を Steinbeck は明確に表現している。これら二つの微笑と "The Snake" の女性の微笑はまさに同質のものである。

もうひとつ引用したいのだが，それはアメリカの女性が子供に母乳を与えなくなっていることへの注意を促している *America and Americans* の中の一文である。

> ... I wonder what the effect on our women may be of retiring from its function a complicated part of their equipment.(6)

ここには女性が女性個有の仕事を放棄しているという慨嘆があり，女性は使命を果すべきだという Steinbeck の主張がある。

これらの引用をふまえて "The Snake" の女性について考えてみると，彼女が研究所に来たそもそもの原因は，彼女には大きなフラストレーションがあったこと，即ち女性として子供が持てないという事が最大ということになる。そしてそれにからんで男性とのトラブルがあったことは容易に推定できる。

The Long Valley の中で，女性のフラストレーションがテーマになっている作品と言えば，"The Chrysanthemum" が最大傑作と言われているが，ヒロイン Elisa Allen の心の動きをたどり "The Snake" の作品理解を助けたい。

Elisa はどうしてあれ程菊の栽培に情熱を注ぐのであろうか。どうして夫に見られないようにして老婆のようにめそめそ泣いていたのであろうか。彼女には植物を育てる親譲りの才能がある。そして菊を育てることは彼女に喜びを与えると同時に，それだけでは燃焼し切れない「力」(energy) をいつも思い出させ，見果てぬ夢へと彼女を駆り立てる結果になっている。

> "Maybe I could do it, too. I've a gift with things, all right. My mother had it. She could stick anything in the ground and make it grow. She said it was having planters' hands that knew how to do it."(7)

と，夫の "... I wish you'd work out in the orchard raise some apples that big."(8) と言う言葉に答える Elisa の気持には複雑なものが混じっているはずである。植物を育てる能力もある，エネルギーもある。しかし彼女にはそのエネルギーをもっと別の所に，即ち母親となることに使えたらという願望を常に感じつつ生活しているのである。

このような Elisa にとって菊は自分の分身であり，子供のような存在であるということができる。そしてその子供をいかけ屋に連れ出させて，自分をとじ込めているサリーナスを出して，華やかな外の世界でもっと別の経験をさせたいと期待した。いかけ屋が帰った後で Elisa は自分では気付かなかったが心に大きな変化があった。それは夫 Henry の "Why—why, Elisa. You look so nice!" ... "... I mean you look different, strong and happy."[9] と言う言葉でよくわかる。これは，菊という子供を誕生させた母親としての情感がそうさせたのであり，心理的に変身をとげたのである。しかし，彼女が夫とともに町に向っている時，その道にいかけ屋の捨てた，愛する自分の子供とも言える菊の残骸を見て，彼女は一瞬にして夢をくだかれ，現実にひき戻されてしまったのである。だから彼女は老婆のようにめそめそと泣いてしまうのである。

Steinbeck はこの作品に於ても女性のフラストレーションをテーマとして，見事に具象化しているのである。このように Steinbeck はフラストレーションを持った女性を多数 "*The Long Valley*" の中に登場させそれぞれ際立った女性像を描き出しているので，"The Snake" もそのような観点から分析することが非常に重要になるのである。

さて "The Snake" にもどって，ストーリーの展開を追うと，次は蛇が実際白鼠を襲いそれを飲み込む部分になる。蛇が獲物をねらっている時，それを見ている例の女性は全く蛇に同化しているようで，彼女も蛇のように緊張して ...her body crouch and stiffen... (p. 83) となり，蛇の頭が前後にゆれる時に (The head weaved slowly back and forth, aiming, getting distance, aiming.) (p. 83) 彼女も蛇と同じような動作をする。(She was weaving too, not much, just a suggestion.) (p. 83) そして鼠が死んだ時は The woman relaxed, relaxed sleepily. (p. 84) とあたかもその女性自身がひとつの仕事をやり終え消耗し切っているかのように描写される。続いて実際に蛇が顎をはずして鼠を飲み込むところは Phillips を通して次のように描かれている。

> Dr. Phillips put his will against his head to keep it from turning toward the woman. He thought, "If she's opening her mouth, I'll be sick. I'll be afraid." He succeeded in keeping his eyes away. (pp. 84–85)

これまでの連想から彼女は Phillips が想像するように顎をはずし，喉を動かしているのであろう。即ち彼女は蛇に self-identify しているのである。

Steinbeck は "The Snake" を書いた年に "The White Quail" を書いているが，その両方の作品に self-identification というテーマが扱われている。"The White Quail" では女主人公の Mary Teller は自分が設計し造らせた庭に self-identify している (...the garden was herself...). (p. 28) そして又そこにやってくる白いうずらにも同じように narcissism と言える自己投影をする。この Mary Teller の場合は，整然と配列され秩序だった庭という非常に人工的なものに自己を投影し，又その庭の女王とでもいうべき際立って美しい白いうずらに陶酔するのである。"... That white quail was *me*, the secret me that no one can ever get at, the me that's way inside."[10] しかしそれが白子 (albino) であるというのは象徴的で，彼女自身の種，即ち女性としての劣性そして不毛を暗示している。この "White Quail" の Mary Teller のように "The Snake" の女性も雄のガラガラ蛇にすっかり自己投影しているのであるが，この蛇というのは Dr. Phillips の説明によると次のようになる。

> "... Rattlesnakes are cautious, almost cowardly animals. The mechanism is so delicate. The snake's dinner is to be got by an operation as deft as a sur-

geon's job. He takes no chances with his instruments.''

. . .

''It's the most beautiful thing in the world,'' ... ''It's the most terrible thing in the world.'' (p. 83)

即ち外科医が冷静にメスをふるうように，蛇はその牙を1ミリの狂いもなく獲物の胸につきたて，与えられた生き餌を殺すのである。そしてこの女性は，蛇が生来持っている能力をそのままに発揮する時の凄惨なまでの美しさに陶酔するのである。これは筋肉の躍動する男性の世界でもあるのだが，この部分は蛇に自分を投影しそこにナルシシズムに似た快感を得ていると同時に蛇への変身願望が描かれている。さらにこの部分からは男性への復しゅうというもうひとつの層を分析することが作品理解の上で大変重要になってくる。その点は後述することにして最後の場面を考えこの章を終りたい。

やがてこの女性は Phillips に次のように言って研究所を出ていくのだが，ここには分析しなければならない二つの重要なことがある。

''... I'll pay for the rats. I want him to have plenty. And sometime—I'll take him away with me.'' Her eyes came out of their dusty dream for a moment. (pp. 85-6)

先ず彼女が最後に蛇の毒を抜かないでくれ，そして沢山餌を食べさせてくれと頼んで帰る理由は唯ひとつ，蛇に生来備っている能力を矯めることなく，いつまでも最大限の力が出せるように，自然のままにさせようとしているからなのである。彼女が metamorphosis を願望したり，蛇と同化したりする原因のひとつは，蛇が自然に備っている機能を最大限に発揮するところを見て，自分には出来ないことへの代償行為を求めることにあるのである。

次に，彼女の眼は一瞬そのうつろのような眠りから覚めたことから，彼女が研究所に来た目的を達成したということがわかる。即ち彼女はフラストレーションをふり払い，これをステップにして，それまでの自己に訣別し，新しい自己に脱皮していこうとするのである。

2

次に，もう一度この作品をストーリーの展開をたどりながら，もう一方の当事者である Phillips の視点から分析してみたい。

モンテレィの缶詰工場街で小さな商売を兼ねた研究所をやっている Phillips は夕暮れ時に標本を作る「ひとで」の採集を終えて研究所に帰ってくる。白鼠や猫やガラガラ蛇を見やりながら，ストーブに火を入れ，湯沸しに豆の缶詰を入れる。鼠に餌を与え，猫を一匹屠殺箱の中に入れガスを送る。そして残りの猫にミルクをやり，ガスのコックをしめた。豆を食べながら実験に使うひとでを見つめている……猫の屠殺と缶詰の豆だけの夕食をとるという行為を同時にすることができる神経を持った Phillips は全てを一秒の狂いもないといった調子で淡たんと片付けていく，有能でしかも勤勉な科学者であるという印象を与える。この印象は例の女性が突然やって来たあともしばらくは変ることはない。

その女性が話しがあると言ってやって来た時には既にひとでの実験を始めていたので，じやまされたくないと思いつつもなんとなく入れてしまう。実験についての説明をしてから，その女性に顕微鏡を見せようとするが，彼女は全くそれに関心を示さない。Phillips は見学者は顕微鏡を見たがるものであるという「常識」を持っているのだが，この女性にそれをあっさり

裏切られてしまう。そして彼女の眼が普通と違うことに気付く。

> She was not looking at the table at all, but at him. Her black eyes were on him, but they did not seem to see him. He realized why—the irises were as dark as the pupils, there was no color line between the two. (pp. 76–7)

彼女の眼は焦点が合わないような感じがするので，彼はすぐにそれを「科学的に」眼の虹彩と瞳孔とが同じ黒で境い目がないせいであると，分析するのである。さらにその女が眼だけを除いて体全部が休息の状態にあるのを見て，Phillips は再び新陳代謝の速度が蛙なみに低いと分析し，同時に彼女に常識を破られたことに苛立ち，The desire to shock her out of her inanition possessed him again と描写される。これは視点をかえると Phillips の意識の中に彼女に対する興味が芽生え始めていることを示している。そして彼は屠殺した猫の喉を解剖台の上で切開し，防腐剤を入れたり，普通の見学者なら興味を持つか，見るのを嫌がりそうなことをするのだが，彼女はそれに全く興味を示さないどころか，Phillips 自身にも興味を示さない。このように，研究所を訪れた女性がそこにいる Phillips の説明や実験に関心を持たないので，なおさら Phillips の方が彼女に興味を持ち始めるという主客の逆転現象が起きるのである。

Phillips の側からこの作品を親察する際には，彼の興味が深まり，やがて彼女の虜になっていく過程が重要な視点となるのだが，Steinbeck はこれをひとでの実験の経過とオーバーラップさせ，時間処理を巧みに用いて見事に描いている。Steinbeck は作品の技巧に心を用い常に新しい実験的手法を用いたと言われている。ここでも構成という面に時間という素材を用いてひとつの実験をしていることがわかる。即ち登場人物 2 名の一幕物の舞台劇という観点から考えることが可能なのである。

第 1 場としては「ひとで」を処理して実験の第一段階に入るまでの間，猫を解剖するところになる。ここでは既に見てきたように Phillips が突然やって来た女性に興味を抱き始めるところである。

第 2 場は 20 分かかる実験の第一段階の部分に当り，そこではその女性の来訪の目的が蛇を買いに来たことであるとわかり，続いて彼女が 5 ドル渡して "... Now he is mine." (p. 80) と言った時始めて Phillips は彼女に異常なものを感じ，心配になりだすところである。(Dr. Phillips began to be afraid.) (p. 80) 彼が気付いた時にはその実験は 23 分経過していた。このように 3 分オーバーしたことから Phillips が既に冷静でなくなり出したことが証明されるのである。

続いて彼女が蛇に食べさせる鼠が欲しいと言い出したところから最後の第 3 場に移り，彼女と Phillips との葛藤が始まる。やがて彼は実験のことを全く忘れ，時間オーバーからひとでを全部捨てることになってしまう。これは，いかに Phillips が彼女にのめり込み，取り込まれてしまったかということの即物的例証であり，時間的経過から生れた効果的逆転性が示されていることにもなる。

このように Phillips が虜になっていく経過をもう少し詳しく分析してみたい。蛇に鼠を食べさせたいという彼女の申し出に Phillips は何かよこしまなものを感じちゅうちょしていた時，彼女は素手で蛇をつかまえようとする。Phillips があわててそれを止めさせ，"Haven't you any sense," (p. 81) となじる。しかし彼女は平然とそれならあなたがやって下さいと言うだけで，Phillips が言った「常識」はこの女性には全く通用しない。Phillips は動揺し (Dr. Phillips was shaken.) (p. 81)，彼女の眼を避けるようになっていることから，彼女が優位に

立ったことがはっきりしてくる。

Phillips はさまざまな抵抗をこころみる中で，鼠が蛇に食べられるのを見て，恐ろしい夢を見る人がいるが，そのような人は鼠を自分の身に置き換え，自分が鼠になっている（The person is a rat.）（p. 81）のだと説明したり，一度その場面を見ると鼠を客観的に見られるようになり恐怖感はなくなるものだと説明したりする。しかし，鼠に感情移入をしかわいそうだと感じている Phillips にとって，その説明は彼女に向ってしているというより，やりたくない事をするために自分の行為を正当化しているに過ぎないのである。彼は抵抗しながらも蛇に見入られた鼠のように既に彼女に取り込まれてしまっている。しかも彼が鼠に感情を移入していることから，この女と彼の葛藤の行方は自ずとはっきりしている。

Phillips は長々と説明をして，ひき延ばしをするのだが，彼女はそれに全く耳をかさず，彼の方も見ずに，"Put in a rat." ... "I want him to eat."（p. 82）と短かく言う場面からも二人の立場が全く変化していることがわかる。

Phillips は蛇が鼠を襲うところは始終見ているはずなのにその場面に非常に興奮して，自分もそれに没入してしまう。又，蛇がその鼠を飲み込む時には1章で見たように，彼女の方を見ることもできないのであり，この段階に到って彼は科学者としてあれ程冷静に物事を処理していたはずなのに，それをすっかり無くしてしまったということになるのである。自分の常識も破られ，科学者らしい態度も無くしてしまった彼は全てが終った時，彼女に "Would you like some coffee?"（p. 85）と申し出る。これで Phillips とその女の立場は完全に主客転倒してしまったのである。そしてそれを明確に証明しているのは女が帰る時にいった言葉である。

> "Remember, he's mine. Don't take his poison. I want him to have it. Goodnight."（p. 86）

これは主人が召使いに言った文字通り命令の言葉である。最後のおやすみなさいの一言は全くの切口上で，いかなる質問も異議も受けつけない厳しさがある。そしてその命令を受けた「召使い」Phillips 博士は，餌をやりに来ますという主人の言葉を後生大事にいつまでも待っているのである。研究所に来たこの身元不詳の女，あまり歓迎されていなかった女が，圧倒的に優位な立場の博士を虜にし逆に支配してしまうという逆転劇はここで完成されたのである。

結

この短編に込められた Steinbeck の実験的意欲を考える場合，いくつかの視点が設定される。前述した黒という色彩による効果性や，客観的描写から生ずる現実性，あるいは時間的処理の巧みさなどの技巧面から確かな手腕が認められると共に作品構成の点でも優れた才能を発揮している。一幕物の舞台劇という観点からみると，時間的処理の面だけではなく，生き物に囲まれている状況設定や，音の効果性などを生かしながら，登場人物の位相の変化を見事に描き切っている。最初にこの作品を舞台劇仕立てで分析することから始めたい。

舞台左手は3段程上って研究所の入口，ドアを境に右手は実験室，そして床の下には海がある。ひっきりなしにかすかな波の音と，猫や鼠の鳴き声が聞える。Phillips が登場すると波の音は小さくなる。……彼がひとでを使って実験の用意をし終った時波の音が入り，例の女が足音とともに登場する。やりとりがあってひとでの第2グループを処理する時，波の音が入る……。

このように舞台で所作が一段落し，場が変る度毎に波の音が聞えてくるのだが，この波の音正確には海に半分突き出た研究所の建物を支える抗に当る波の音であるが，Phillips が何かに集中している時や，例の女性に興味を持ちのめり込んでいる時には耳に入らない音なのである。しかしそれは実験の区切りだとか蛇に餌をやる合間には聞こえてきて，作品の中ではこの音が6回聞えてくるのだが，一幕物の演劇に幾つかの場を展開させる効果があり，又それらが作品の緊張感の連続を一瞬とぎらせ，さらに次の緊張へとつないで，作品に深みを与えているのである。

さて舞台の方だが，Phillips はもうひとつの生き物の小道具である猫を殺し，その解剖をその女の前できわめて慣れた手ぎわで行い，有能な科学者らしいふるまいでその女性に対して絶対的優位性を誇っている。Phillips が手すきになるまではすみの方にいた女が，やがて蛇の檻の所に行ってからは舞台中央に出てくる。そしてそれまで中央にいた Phillips が彼女のまわりを動き回るということになる。そしてその女にのめり込み取り込まれて実験を台なしにしひとでを海に捨てた時，Phillips の常識や科学者としての論理性も同時に捨てられたことになる。二章でも見たように又それまで抵抗していた Phillips が女の意のままに，女が買った鼠を蛇に与え，その鼠が飲み込まれた時，あたかも蛇に飲み込まれるかのように完全に女性に支配されこの逆転劇は完成するのである。全てが終りその女性が帰ってから，舞台は暗転し，最初と同じように波の音，猫や鼠の鳴き声がする中 Phillips が疲れた足どりで帰ってきて，もし祈れたら……のモノローグのうちに舞台暗転し幕になる。

この作品は細かい部分が多いので演劇というよりは映画などの分野でなければ作品化などはできないと思うが，そのような実際的なことはさておき，この作品はこのような一幕ものとして読者が頭の中で自然に構成するようになっていると言える。*Of Mice and Men* の例を出すまでもなく，Steinbeck は演劇に興味があり，その傾向がどの作品にも多少あるにしても，この作品にはそれが色濃く出ていて，作品に著じるしい効果を与えているのである。

次の視点として，先に引用したように Steinbeck がこの作品を書くきっかけとなった事件を *The Log from the Sea of Cortez* の序で書いているが，彼がこの現実に起った事件からすぐに，創世記の蛇と楽園を追われる Adam と Eve を思い出してこの作品の重要なヒントにしたということが挙げられる。Steinbeck の母親は小学校の教師をしていて家には沢山の蔵書があった。Steinbeck はこの母親の手により読書指導も含めた教育を受けたし，彼自身も読書好きな少年であった。その頃の愛読書の中に Milton の *Paradise Lost* も入っていた事が知られている。それで，当然この事件と「失楽園」の蛇とを結びつけてこの作品のヒントにしたことは容易に想像できることなのである。Steinbeck は作品発想の下敷として聖書を良く用いていることは周知の事実である。代表的なものとして例えば *East of Eden* では創世記の Cain と Abel から Charles と Adam, さらに Cal と Aron という人物像を設定しているし，*Grapes of Wrath* は出エジプト記をオーキー達の大移動に重ねたものであった。

さて Milton の「失楽園」第9巻で悪魔は神への復しゅうのため蛇に変身して Eve を誘惑し，Adam をそそのかさせたのであるが，Steinbeck はここから復しゅうするという発想と，蛇に化身するという発想を得たと思われる。さらに聖書では神が Adam と Eve を楽園から追放する時の言葉の中に次のような一節がある。

> You shall be eager for your husband, and he shall be your master.[11]

ここで神が言明しているのは Adam を Eve の支配者にするということであるが，Steinbeck

の作家的屈折した意識はこの "The Snake" でその関係を逆転させたのである。Adam と Eve が男と女の原型であることを思い合わせると，この逆転現象は女が男を支配することなのである。

Steinbeck がこの作品の中で蛇と self-identify しようとする黒い服を着た女性に託したものはまさに「失楽園」の蛇の執念と魔性であった。この魔性は男の常識や論理性を超えた不可解な領域即ち女性特有の神秘的な世界である。Steinbeck がこのような女性特有の執念と魔性を体現化した存在として蛇を設定したと解する時，正に "The Snake" というタイトルは現実味を持ったものとして生きてくるのである。

さて Steinbeck がこの作品で試みようとしたものは何であろうか。Phillips は例の女性が去ってから次のように考える。

> "I've read so much about psychological sex symbols," he thought. "It doesn't seem to explain. Maybe I'm too much alone. Maybe I should kill the snake. If I knew—no, I can't pray to anything." (p. 86)

これでわかるように，彼はその女性も本で読んだことに当てはめようとする。しかしそれでは解決できないことは先に見た通りであり，「性象徴」ということも，「孤独すぎる」ということも彼女を理解する鍵とはならない。「蛇を殺すべきかも知れない」という思いも蛇を殺してしまえばたちどころに雲散霧消してしまうような解決策にはならないし，そもそも召使いたる Phillips にはそれもできないことなのである。あとは祈ることしかないと彼は考えるが，それも自分から「何物にも祈ることは出来ない」と拒否している。以上の引用から考えて，Phillips 博士の不幸は世間並の常識はあるのだがそれを乗り超えることができないという所にある。何事も常識と法則に当てはめなければ安心できず，納得もできないという性格がその原因となっているのでこの女性のような常識からはずれた人が出現した場合には適切に対応することができないのである。ようするに Phillips に代表される男性は，常識や理性や，書物などを通して得た知識で処理できる論理性や法則性に依存することしかできないのである。

さて一方この作品に登場した女性は self-worth を失い，自己喪失の寸前に Phillips の所を訪れたと思われる。それ故に彼の行う実験などには全く関心を示さず，自分のやらなければならないことだけを追求していく。彼女には母親特有の飼育願望があり，しいたげられた女性が自己を回復する願望，即ち新しい自己への変身願望もあると言えるのである。そのような彼女が，蛇が獲物をとりそれを飲み込むシーンを見るところから，蛇に self-identify し，ナルシシズムを経験し，それがフラストレーションの昇華作用となって本当に新しい自己へと変身していったのである。しかしその際彼女の持っていたフラストレーションは形をかえて Phillips に移動してしまうのである。こうしてこの女性は古い自己を蛇に託して Phillips の所に残し，自分は新しく再成した存在として存在し続けるのである。それでフラストレーションを背負った Phillips がいくら探してもその女性はどこにも見つからないのである。それ故にこそ，Steinbeck はこの女性に黒いスーツ＝喪服を着せ，自分の過去に別れを告げるという儀式をさせたという象徴性が生きてくるのである。

このように女性には男性の理解を全く超えた領域がある。それは女性が人間という種を再成し存続させることに直接携っているという事実に由来することもあって，女性は原始的，自然的側面をより強く持っているということである。そして男性は常に女性の中にあるう窺い知ることのできない神秘的な領域があることを認識させられることになる。

このような男性的特性と女性的特性の葛藤を通して Steinbeck は人間を観察しようとした

のである。しょせん人間には男性，女性という二つの性しか存在しないので Steinbeck はいくつかの群像を描くことよりは，それぞれの性を単数に純化してこの作品に登場させた。Steinbeck の意図はどちらが正しいかという価値判断にあるのではなくて，男と女の外形と行動を的確に描写するという自然主義的手法を駆使して，女性の神秘性とそれを理解できない男性心理を realistic に描くことであり，その意図は見事に結実していると言えるのである。

注

(1) John Steinbeck, *The Log from the Sea of Cortez* (Penguin Books, 1976), pp. xxii–xxiii.
(2) Peter Lisca, *The Wide World of John Steinbeck* (New Brunswick, N.J.: Rutgers University Press, 1958), p. 95.
(3) John Steinbeck, "The Snake" *The Long Valley* (New York: The Viking Press, 1964), p. 75. 以下 "The Snake" からの引用にはこの書の頁数を記す.
(4) John Steinbeck, *The Grapes of Wrath* (London: Heinemann, 1972), p. 400.
(5) "The Promise", *The Long Valley*, p. 264.
(6) John Steinbeck, *America and Americans* (New York: The Viking Press, 1970), p. 105.
(7), (8) "The Chrysanthemums", *The Long Valley*, p. 11.
(9) *ibid.*, p. 21.
(10) "The White Quail", *The Long Valley*, p. 41.
(11) *The New English Bible* (Oxford Univ. Press, Cambridge Univ. Press, 1970), Genesis 3–16.